

# 『狭衣物語』異本系本文の論理

——道成の造型を中心として——

吉 野 瑞 恵

## I はじめに

『狭衣物語』はさまざまな伝本の間で本文の差異が多く、さらにその揺れ幅は『源氏物語』とは比較にならないほど大きい。その差は、地の文、登場人物の発話や和歌、心内語に至るまで、あらゆる面に及んでいる。しかし『狭衣物語』の場合には、『とりかへばや』の原作と改作本のように、結末まで異なるというような違いがあるわけではない。登場人物、プロットは共通していながら、それらを形づくる表現が、多彩な姿を見せているということなのである。なぜこのような差が生まれたのか、これは『狭衣物語』特有の現象なのか否か、『狭衣物語』特有の現象だとすれば、『狭衣物語』の何が伝本の多様さを誘発したのか、どのような動機で多様な本文が生み出されることになったのかなど、現時点では答えが出ない問題も多い。しかし、このように多くの差異を生み出したことそれ自体が、『狭衣物語』という物語が持つ可能性と豊かさを証明していると考ええることも可能であろう。

『狭衣物語』の本文系統の分類については諸説あり(Ⅰ、巻ごとに系統が異なっていることも、分類を錯綜させてい

る。そのような状況ではあるが、現存する写本は、大きく以下の三系統に分けられるというのが、通説になっている。

深川本系 内閣文庫本（岩波古典文学大系の底本）、深川本（小学館新編日本古典文学全集の底本）など。

異本系 伝為家筆本、伝慈鎮本など。

流布本系 筑波大学蔵・春夏秋冬四冊本（新潮日本古典集成の底本）、版本、古活字本など。

近年では、現存最古の写本（鎌倉初期写）である深川本が、小学館新編日本古典文学全集の底本として採用されたことによって、広く認知されるようになった。しかし、深川本が原典に近いとする説がある一方で、それを否定する説もあつて<sup>(2)</sup>、いまだ決着を見ていない。深川本系と流布本系の本文が比較的近いのに対して、異本系の伝本は独自異文を持つ箇所も多いが、異本系の伝本は文学性の低い改作本と見られてきたため、本格的に研究対象とされることがなかった。しかし新たな研究動向として、片岡利博のように<sup>(3)</sup>、原典に近い最善本を求めること自体に疑義を呈し、さまざまな系統の本文を、等しく物語本文と認める立場も現れた。『狭衣物語』の多様な本を、積極的な本文改変の試みの結果だと見るのである。

このような研究動向を受けて、近年では、改作本としてこれまで等閑に付されてきた異本系の伝本に焦点を当て、それらの伝本が持つ独自の論理を読み解く論も見られるようになった<sup>(4)</sup>。稿者は、今井久代・木谷眞理子とともに異本系の伝本の注釈作業を進めている。巻一については、伝慈鎮本（鎌倉初期写）を底本とし、為家本<sup>(5)</sup>と校合しながら、異本系本文の特徴を探ってきた。こうした作業の中で、異本系の本文が紡ぎだす人物像と、物語を展開させていく論理が、他の系統の伝本とは異なることがわかってきた。その成果として、今井久代は、巻一の天稚御子降臨譚前後の表現の特徴や、飛鳥井女君をめぐる物語における女君の人物造型の特徴を、『源氏物語』との関連を視野に入れながら論じている<sup>(6)</sup>。本稿では、主人公狭衣の「身分違いの恋」として語られ、最後は悲劇に終わる飛鳥井女君の物語において、「悪役」として登場する式部大夫道成の語られ方を、慈鎮本と深川本を比較しつつ、慈鎮本の持つ独自の論理を明らかにしたい。本来は流布本系の本文とも比較すべきであるが、深川本と流布本系は比較的本文が

近く、煩雑になるため、必要な箇所では流布本の本文を掲出することにした。

## II 道成は色好みなのか

『狭衣物語』において、巻一に描かれた飛鳥井女君をめぐる主人公狭衣の恋物語は、展開の巧みさ、巻二以降で他の登場人物に影響が波及していく射程の長さなどの点で、『狭衣物語』の一挿話にとどまらず、物語全体において重要な役割を果たしているといえよう。また、飛鳥井女君の物語は、『狭衣物語』の中でも後世の読者から特に愛好された恋物語だった。

飛鳥井女君が仁和寺の僧に誘拐されそうになっていたのを、偶然に通りかかった狭衣が助けたところから、二人の身分違いの恋が始まる。二人の仲は深まるものの、狭衣は女君に身元を明かそうとせず、女君も身元を明かさない。狭衣は女君に強い愛着を覚えているにもかかわらず、身分差ゆえに、女君をこれから先どう処遇するか考えあぐねているうちに、女君は乳母に欺かれて、狭衣の従者である式部大夫道成の筑紫行きの船に乗せられる。女君を偶然に見初めて、主人の恋人とも知らず、妻にと望んだ道成であったが、女君は道成の妻になることを拒み、海に入水しようとするというのが、巻一の飛鳥井女君をめぐる物語の概略である。このような概略については、深川本と慈鎮本には差異が見られない。

狭衣と飛鳥井女君の恋を困難にしているのは、父親も母親も天皇の子という、上流貴族の中でも最高の身分に生まれた狭衣と、上流貴族に属する中納言の娘ながら、両親を失って経済的にも逼迫している飛鳥井女君との身分差であった。狭衣は、きょうだい同然に育ってきた、いとこの源氏の宮への想いゆえに、飛鳥井女君に強く惹かれながらも、彼女との未来の具体像を思い描けないまま結論を先送りする。飛鳥井女君は、狭衣を愛しているものの、身分差ゆえに彼との未来に希望を見いだせない。この二人に、生計を維持する手段がなく、追い詰められている女君の乳母と、女君を見初めて、自分の主人の恋人であることを知らずに求婚する狭衣の従者・道成の思惑とが絡み合って、悲

劇が生まれていくのである。乳母も道成も、女君をだまして結果的に狭衣との仲を引き裂き、女君を入水に追い込むという点では「悪役」になるのだが、語り手は、彼らの側の事情をも語り、より大きな構図のもと女君の悲劇をとらえようとしている。そして、慈鎮本ではその傾向がより強くなる。

まず狭衣の従者道成の描写から検討してみたい。道成は狭衣の乳母子の従者で、正五位下に相当する式部大夫の職についており、中流貴族層に属する。『源氏物語』では、惟光の役回りに相当するが、夕顔のもとへの忍び歩きにも付き従っていた惟光とは異なり、道成は狭衣が飛鳥井女君のもとへ通っていることを知らない。だからこそ、主人の恋人に求婚するという行き違いが生ずることになる。語り手が道成を紹介する箇所を、深川本と慈鎮本を対照しながら次に示したい。

A ① この殿の御乳母の大式の北の方にてあるありけり。子どもあまたある中に、式部大夫にて、来年、官得べき、かやうの人の中には、心ばへ、容貌などめやすくて、少々の上達部、殿上人などよりは、世の人も心ことに思ひたり。自らの心にも、また思ふことなく、いみじきすき者の色好みにて、いかで、心、容貌よき、すぐれたらん人を見んと思ひて、婿にほしうする人々の辺りにも寄らず、君の御真似をのみして、夜中の御供にも後れず、私の里わたりをのみ尋ぬるわざのみして

(深川本 一一七)(7)

B ① この殿御乳母の大式の北の方にてある、子ども多かる中に、来年つかさ得べきありけり。かやうの人の中には、心も容貌もめやすきものに、人にも思ひ言はれて、見ならひにや、やむことなき、思ふさまならむ人を見ばや。さてつひのとまりにも定めて、遠きほどにもてかしづきて率て行かむと思ひて、同じほどの人の婿などにもならざりけり

(慈鎮本 六一オ)(8)

道成が中流貴族としては性質や容貌も感じがよく、それは世間の人も認める点であるとする点は、両本に共通する。深川本では、道成は少々の上達部や殿上人よりも世間的に評価されているとして、本人もそのことを意識し、傍線部にあるようにたいそう色好みだとする<sup>9</sup>。傍線部「私の里わたりをのみ尋ねるわざ」も、「里下がりした女房の私宅を訪ね歩くこと」と解釈されている<sup>10</sup>。道成は色好みの理想を追い求め、実利をもたらししてくれる妻ではなく、美しく気立てもよい自分好みの女性を得たいという思いを持っていた。広隆寺で偶然見かけた飛鳥井女君は、それになう女性だったというのである。流布本でも、深川本と同様に道成が色好みであることを、次のように語っている。

かやうの人などのなかには、心ばへかたち目やすく、すきずきしう色好むありけり。「いかなりともかたちすぐれたらむ人を見む」とて、妻もなくて過ぐすに（九二）<sup>11</sup>

深川本でも流布本でも、狭衣のような上流貴族にふさわしい色好みの傾向を、中流貴族である道成も持っていたとする。これは、『源氏物語』夕顔巻で、光源氏を夕顔に手引きしようと奔走する惟光が、「おのれも隈なきき心にて」と語られるのとも共通している。

慈鎮本では、傍線部「見ならひにや」が「狭衣の真似であろうか」の意で、深川本の「君の御真似をのみして」に相当する。しかし慈鎮本は、深川本で道成を特徴づけていた「いみじうすき者の色好みにて」という表現を持たない。そして、傍線部にあるように「やむごとなき、思ふさまならむ人」を妻にしたいという願望を持っている。「やむごとなき」は、あとの「同じほどの人の婿などにもならざりけり」との関連からすると、中流貴族である道成よりも身分が高いという意味になるだろう。ここでは、「身分が高く理想的な人を妻にして、その女性を終生の妻として、任地までの遠い道のりの旅に、大事に世話をして連れて行きたい」という道成の願望が語られている。だからこそ、同じ身分の中流貴族の婿にはなろうとしない、というのである。「みならひ」は、狭衣の色好みの真似ではなく、狭衣の生活圏にいるような女性を求めようとする点で、狭衣の真似をしているということになるだろう。

深川本の道成が、色好みゆえに、実利を離れて美しい女性を求める男であるのに対して、慈鎮本の道成は、自分よりも身分の高い女性と結婚して、「かしづく」ことを夢見る男である。飛鳥井女君は、両親を失って零落しているとはいえ、帥中納言の娘で、もとは上流貴族の姫君である。そのような飛鳥井女君の素性を、狭衣と女君が結ばれる場面の直後で、語り手が明かすが、狭衣は彼女の素姓を知らないとする点で、両本に違いはない。狭衣は、女君が思いのほか上品であると思いはするものの、女君がもとは上流貴族の姫君であつたことは知らず、女君の心の中にあつたであろう、零落した我が身に対する複雑な思いには気が付くべくもない。それに対して、深川本と慈鎮本とは時期が異なるが、道成は飛鳥井女君の乳母に結婚を申し入れた時点で、女君の素姓を知つたと考えられる<sup>(12)</sup>。もとは上流貴族の姫君という女君の身分は、慈鎮本で語られていた、高貴な妻を求める道成の理想に合致することになる。狭衣と女君の身分差が、二人の恋に影を落としていたわけであるが、慈鎮本では、飛鳥井女君と道成の身分差が、道成の恋を発動させる重要な要素になっている。

道成が飛鳥井女君を見初め、求婚するに至る経緯についても、両本には大きな異同が存在する。長谷川佳男は、流布本の系統に属する古活字本と異本系統に属する為家本とを比較して、求婚の経緯に大きな差があることを指摘している<sup>(13)</sup>。深川本と慈鎮本の異同は、長谷川の指摘する古活字本の本文と為家本の本文の異同と同様である。この求婚の経緯の差は、道成と乳母の造型にも大きな影響を及ぼすことになる。

A② この女君、太秦に籠りたまへりけるを、ほのかにのぞきて見けるより、異心なくなりて、消息などしけるを、この乳母は、いみじう耳つきに思ひて、返事などしけれど、只今は、まだ、ことなう頼む人の、命にも換へてんと言ふも見ければ、たちまちの言承はえ

B② この飛鳥井の君の太秦にありしをほのかに見て、いかで出でむほどに問はばや、いかにして言ひ付かむ思ひしほどに、あさましき法師のにはかに惑はしてしかば、行く方なく思ひけるに、寺なりける樋洗のていの、ものへ行く道に会ひたりけるを捉へて問ひけ

せで、「官などたまはりて、下りたまはんほどは、さもやあらん。まことに思さば、それまでも待ちきこえん」と契りけるに、かく事も違ひて、身はいと頼りなし、なま君達のいたう隠れ忍びて、時々おはする、はたいとふさはしからねば、東男も尋ねいでて、往なんとおどすなりけり。

(深川本 一一七―八)

れば、「そこそこにおはする別当殿の藏人の少将こそ時々通ひたまへ」など言ひければ、「それは妻持ちたまへれば、まことしくもよも思ひたまはじ。一人ありて今日明日筑紫へ下らむに、いかで思ふさまなる人得てしがなと思ふに、おとどにさやうに聞こえよ」など語らひて、懇ろに言ひわたるを、

(慈鎮本 六一ウ)

深川本では、道成は、女君が広隆寺に参籠していた時に彼女の姿を垣間見て心を奪われ、すぐに求婚の手紙を送ったことになっている。乳母も道成の求婚に乗り気だったが、この時点ではまだ仁和寺の僧（ことなう頼む人）の援助をあてにしていたので、すぐに承諾はせずに、「あなたが国司に任官したら、その時には」と氣を持たせる返事をしていた。その後女君は仁和寺の僧に誘拐され、その途中で狭衣と出会うことになるので、狭衣が女君と出会う前に、道成は女君に求婚していることになる。また乳母は、道成が求婚してきていることを知ったうえで、仁和寺の僧の援助と道成の経済力を天秤にかけ、さらに自分は東男と一緒に東国に下るといって女君を脅していたとする。

それに対して、慈鎮本では、道成は広隆寺で女君を見初めたものの、女君が仁和寺の僧に誘拐されてしまったので、彼女の身元を確かめることができない。筑紫下向の直前に、寺にいた樋洗童に偶然に出会って、藏人少将（実は狭衣）が女君のもとに通っているという話を聞くが、藏人少将には妻がいるので、女君を正式な妻にしようと思っ

つまり、慈鎮本では、狭衣が女君と結ばれたのちに、道成は女君に通っている恋人がいることを知ったうえで求婚したことになる。この求婚の時期は、乳母が女君の懐妊を知った後である。乳母は生活に窮して、求婚してきた陸奥の将軍とともに東国に下ることを考えており、女君も乳母に同行することになっていた。しかし、女君の懐妊が発覚



したため、乳母は女君を同行させるわけにいかなくなり、女君の扱いに困っていた。そのような時に、女君を正妻にしたいという強い意志を持った道成が現れたわけで、乳母にとって道成は理想的な結婚相手と映り、女君に知らせることなく勝手にこの結婚話を進めてしまうことになる。慈鎮本の道成の造型と求婚の時期は、女君を欺くことになる乳母の選択に免罪符を与えていると言えよう。

乳母が、道成に説得されて、女君を筑紫行きの船に乗せることを密かに決める場面でも、以下のように両本に大きな異同が見られる。

A ③ されど、この式部大夫、親の送りに、筑紫へ下るに、さうさうしきに、さるべからん人の、をかしからんをがな、率て下りて、やがて我が国へも行かばやと思ひて、太秦の人を尋ねけるに、「かくなん、別当少将の、時々通ひてあんなれば。乳母は承けずな」と言ふ人のありけるを、喜びながら消息したりけるに、乳母、思ふやうにめでたくおぼえて、東も思ひ止りて、「まことに思ふことならば、しばし、君にも知らせたてまつらじ。下りたまはんほどに、みそかに迎へたてまつりたまへ」と言ひ遣りけるを、えもいはず喜びて、「さやうの細君達の蔭妻にておはすらん、口惜しきことなり。ただ心見たまへ。男の御幸ひにてこそあらめ。ゆめ違へたまふな」とのみ言ひおこするに、いかにせ

B ③ 「一人ありて、今日明日筑紫へ下らむに、いかで思ふさまなる人得てしがなと思ふに、おとどにさやうに聞こえよ」など語らひて、懇ろに言ひわたるを、「<sup>a</sup>いかなるべきことにか。ただならずおはすれば、人の御心も知らず中空にや」など言ひつつ歩く。みづからも来つつ、言良く語らひ、大殿の我が世にためてたからむことなど言ひ聞かするに、<sup>b</sup>いかにせまし、かかる君達は、もて扱ふわたりをこそいみじきものとすれ、ひとつには頼むべきかは、これは今日明日筑紫へ下りて、来年は上り、また再来年はうち具して下りたまはむ、げにいかにめでたし、大殿の中納言殿の乳母子にて世のおぼえめでたく、おほかた容貌もめやすかんなるを、聞きすぐさむとは、いと口惜しければ、



んと、さすがに思ひ嘆きつる心の中、思ふことなく心  
ゆき増して、人知れず、上下の人々求め集めなどして、  
ゆるらかにとぶらひ、おこする物ども忍びて取り散ら  
し騒ぐも、女君はかけても知りたまはず。

(深川本 一一八〜九)

かかることなど女君にも聞こえず。さらば、御心とは  
よも良き事と思さじ、かくただならぬ御ありさまも、  
いと心苦しけれど、「ただその下らせたまはむ暁にな  
りて、迎へきこえさせたまへ」など契りて、このこと  
は、我もうち具して行かむとすれば、ゆきはてて、よ  
ろづ人知れず出で立つも、いかでかは知らむ。

(慈鎮本 六二〇〜ウ)

深川本では、筑紫に下ることが決まった道成が、再度乳母に女君との結婚を申し入れようと思つていた時に、別当  
少将（蔵人少将）が女君のもとに通つてゐるが、乳母は承服してゐないと聞いて、喜んで乳母に女君との結婚を申し  
入れるという流れになっている。その際に道成が乳母に伝えた言葉が、傍線部の「さやうの細君達の蔭妻にておはす  
らん、口惜しきことなり。」である。「細君達」は、『狭衣物語』にのみ見られる独自語で、上流貴族に属していても  
頼りにならない蔵人少将を侮蔑する語である。蔵人少将は検非違使別当の息子で、かろうじて上流貴族の君達と言え  
るものの、現在の位は五位で、同じく五位の式部の大夫と変わらない。傍線部の「男の幸ひ」は、内閣文庫本や流布  
本では「おもとの幸ひ」となっており、この結婚が乳母にも利益になると、道成が訴えていることになる。

「細君達」に類似する語として「なま君達」がある。深川本では、乳母の心中を表す地の文で、「なま君達のいたう  
隠れ忍びて、時々おはする、はたいとふさわしからねば、東男も尋ねいでて、往なん、とおどすなりけり」（一一八）、  
道成が女君に言い寄ることばの中で「なま君達は、いとなづまじう、ここだしきものぞよ」（一三五）と使われてい  
る。慈鎮本でも、道成の女君に対する発話の中で「なま君達はなかなかしきものに侍り」というように使用されてい  
る。深川本では、さらに別の箇所、道成が女君に向かって「その青びれ男によりて、命も消えぬべく見えたまふこ

そ、かへりては心づきなけれ。」(一三九)と発言している。「青びれ男」も、他の作品には見られない『狭衣物語』の独自表現である。深川本の道成は、上流貴族の蔵人少将よりも身分的に劣っていても、自分の方が頼りになると自負しており、そのことを繰り返して乳母や女君に訴える。

慈鎮本では、道成は求婚の際に自分の主家の繁栄ぶり(大殿の我が世にためてたからむこと)を乳母に語るものの、蔵人少将よりも自分と結婚する方がよいと、表立って口にすることはない。一方、深川本には見られなかった、通ってくる男は頼みにできないと考える乳母の発言(傍線部a)と心内語(傍線部b)が繰り返される。慈鎮本は、女君の将来を考えあぐねていた乳母が、道成の出現によって、あらためて女君と蔵人少将の結びつきには未来がないことを考えざるをえなくなったとするのである。

傍線部aでは、女君が懐妊したものの、蔵人少将の援助は当てにできそうもなく、中途半端な状態のままだという。「言ひつつ歩く」とあるのが不審だが、女君の懐妊という事態に追い詰められ、かといつてすぐに道成の求婚を受け入れることもできず、逡巡する乳母の様子を語っていると考えられる。また、傍線部bでは、蔵人少将程度の上流貴族の場合、妻の親に婿として大事に世話されるならば、妻を素晴らしいと思うだろうが、両親に先立たれて経済的に困窮している女君の場合には、蔵人少将の愛情をあてにはできない、と乳母は考える。乳母のこのような認識は、当時の貴族社会においては広く共有されていたものであったろうし、道成が飛鳥井女君の結婚相手にふさわしいとする乳母の判断は、間違っていないだろう。狭衣の乳母子で将来も有望で、容貌も悪くない道成の求婚は、万策尽きた乳母にとって、願ってもないチャンスであった。慈鎮本では、追い詰められた乳母が、身ごもっている女君を気の毒に思いながらも、この求婚を受け入れざるを得ないような状況がつくりあげられている。乳母は女君のことを案じつつも、次第に状況に流されていくことになるのである。

『狭衣物語』の乳母像は、説話や先行する物語との関連、あるいは継子譚の変形などという観点から、悪役という側面に焦点を当てて論じられてきた<sup>(14)</sup>。しかし、慈鎮本では、懐妊した女君を前にして、蔵人少将は当てにならないと不安に思う乳母の心内が語られることによって、道成との結婚話を勝手に進めたのも、乳母なりに女君を思っ

のことだと納得できるようになっている。深川本の乳母は、早くから道成の経済力をあてにしてはかりごとを巡らす  
が、慈鎮本の乳母は、女君を騙そうとする悪辣な乳母ではないのである。

### Ⅲ 飛鳥井女君の中流貴族嫌悪と道成の自負心

こののち、乳母は土忌のためと嘘をついて女君を連れ出し、女君は道成が差し向けた車に乗せられる。やがて到着  
した淀で、船に乗せられた女君は騙されたことを確信する。その時、同行する道成の姿を女君は目にするが、道成の  
描写にも両本の間で相違が見られる。

|   |   |
|---|---|
| <p>A④―1 起き上がりて見れば、岸に船寄せて、車の<br/>床かき下ろし、乗せ移さんとて、廿余ばかりなる男の、<br/>きよげなりとやいふべからむ、つきづきしう、そぞろ<br/>かなるさま、容貌したる、いみじう心地よげにもてな<br/>して</p> <p>(深川本 一三四)</p> | <p>B④―1 ものおおぼえで起き上がりて見れば、岸に<br/>船ども寄せて、車よりかき下ろして、廿ばかりなる男<br/>のきたなげなしとや人はいふらむ、いと誇りに心地<br/>良げなるぞ、主と思しき。</p> <p>(慈鎮本 七〇ウ)</p>                |
| <p>A④―2 何者ならん、賀茂の祭、行幸などにや、別<br/>当の具のものにて、恐ろしげなるものども、捧げつつ<br/>などある者こそ、かやうには見ゆれと、うとましげな<br/>るに</p> <p>(深川本 一三四)</p>                               | <p>B④―2 行幸・賀茂の祭の折に、別当のしりに鉦と<br/>かやいふ物のありしよそのさこそ裁ちてまだらにしな<br/>したるに、袂おどろおどろしう赤みて、鬚黒らかなる<br/>を、あな恐ろしとかしらの髪も上がる心地するに</p> <p>(慈鎮本 七〇ウ―七一オ)</p> |

\* そぞろかなる↑そろ／＼かなる

A④—1とB④—1は、微妙な表現の差はあるものの、両本ともほぼ内容が共通している。「きよげなりとやいふべからむ」「きたなげなしとや人はいふらむ」という表現から、客観的に見れば、道成はまずまずの容姿ではあるものの、女君の眼にはそう映らないというニュアンスが感じられる。また、A④—2、B④—2では、両本とも、道成の姿が賀茂の祭や行幸の折に、武器を持って検非違使別当に付き従う者を連想させるとする。道成は、式部大夫という文官でありながら、飛鳥井女君の目には武士的な存在に映っているということなのだろう。慈鎮本の「ありしよそのさこそ裁ちてまだらにしなしたるに、袂おどろおどろしう赤みて」<sup>15</sup>という箇所は、解釈が困難であるが、道成の服装も女君にとつては普段見慣れない、嫌悪感を呼び起こすものだったということだろうか。深川本では、道成の姿を目にしての女君の反応は「うとましげなるに」とされていたが、慈鎮本では、傍線部にあるように、「あな恐ろしとかしらの髪も上がる心地するに」となっている。「かしらの髪も上がる」は、他の作品には見られない独自の表現で、「かしらの毛太る」<sup>16</sup>に類する、激しい恐怖を表す表現と考えられる。女君の嫌悪感は、慈鎮本ではより激しく、人間ならざるものを目にしたかのようなものである。

女君が道成が差し向けた車に乗せられる場面でも、次のように、車に付き従う者たちの武装した有り様に対する女君の恐怖心が語られていた。これは両本に共通する。道成は、女君の生活圏にこれまで存在していなかった類の人物なのである。

A⑤ 門引き出づるより、胡籙などいふもの負ひて、見も知らず恐ろしげなる姿したる者ども多くて、火は昼のように灯して、「明け果てぬれば。前に、疾く疾く」と言ふけはひども、あやしう恐ろしきに

(深川本 一三二)

B⑤ 門引き出づるより、胡籙負ひたる人々あまたして、火、手ごとに灯したる、もの恐ろしき気色したる人、声々に多かる、あやしう心得ず、胸ただつと塞がりて思ゆれば

(慈鎮本 六九ウゝ七〇オ)

道成を女君にとって理想の結婚相手と考える乳母、そして中流貴族としてはなかなかのものであるとする語り手と、生理的な嫌悪感とも言うべき恐怖の感情でしか見られない女君との差は大きい。騙されて連れて来られて、突然目にした道成に、女君が拒否反応を示すのは当然ではある。しかし、この激しい拒否反応には、本来は上流貴族であった飛鳥井女君の、中流貴族に対する差別的なまなざしも混じっている。飛鳥井女君の物語において、狭衣と女君の身分差は、狭衣の側からも女君の側からも、繰り返し問題にされてきた。物語は二人の身分差を焦点化する。しかし、慈鎮本では、飛鳥井女君と道成の身分差をも浮き彫りにしている。道成は上流貴族出身の飛鳥井女君に憧れのまなざしを向けるが、飛鳥井女君は、中流貴族の道成に嫌悪感を覚えるのみなのである。

筑紫行きの船に乘せられた女君は、衣を引きかぶって泣き伏し続ける。そのような女君に道成は慰めの言葉をかけるが、女君はより一層泣き募る。この場面で女君の心を何とか動かそうと道成が口にする言葉には、両本で大きな異同が見られる。

A ⑥ 「さこそなたまふとも、たけきこと、今はよもおはせじ。あな、をこがましや。なにがしの少将の蔭妻にて、道行き人ごとに心を尽し、胸をつぶしたまふ心もやは。あやしうせん、またなく思ひかしづききこえんを、取り所に思せかし。なま君達は、いとなづまじう、ここだしきものぞよ。我が殿のおはしまさん世には、なにがしらに、その君達まさらじ。さばかりの少将、兵衛佐にならんと思はば、なりなん。よし、見たまへよ。来年ばかり還殿上して、五位藏人になりて、

B ⑥ 「いでや、さらば、さのたまはすとも、たけきこともおはしまさじと思へば、をこがましうこそ。さりともし少将の蔭妻にて、道行き人ごとに胸をつぶしたまはむやは。あやしうとも、またなきものに思ひきこえさせむを取り所に思し召せ。なま君達はなかなかしきものに侍り。殿おはしまさむかぎりは、おのれらを、えその君達あなづらじ」

(慈鎮本 七一ウ)

その主と、いづれが行く末まさりけると、それらは、まろらに追従し、言ひ触れん、とぞ惑ふめる。思ふさまなる御宿世とぞ聞こえんかし。なま前追はぬや、口惜しう思ひたまはん、国の中には、それ、ことにもあらず。まめやかには、ただ何心もなく、飽かぬことなく、安らかにて、過したまへ。君達ならずとて、己をば、人のわろき者に思ひたらぬなり。女にも、まだ厭はれはべらず。御前たちにまさりたる人々なん、いたう、いかで、いかでとぞのたまへれど、さるべきにや、太秦にて見たてまつりしより、思ひしみにし心の、直りがたくて、かく面目なきめを見るべきにこそ」

（深川本 一三五―六）

\* まめやかには↑まめやかにはには

波線部は慈鎮本にはない深川本独自の表現である<sup>(17)</sup>。深川本では、道成は藏人少将に激しく対抗心を燃やし、なまじの上流貴族の子弟よりも自分の方が出世が見込まれると、具体的な官職を挙げながら女君に訴える。また、上達部や殿上人には付く前駆が自分には付いていないけれども、国司として地方に赴任すれば、そのことは問題にはならず、女君も満足のゆく暮らしが送れると言う。上流貴族でないといっても、世間の人からは評価され、女性からも好かれ、女君よりも家柄が優れた人からも結婚の申し込みがある、と訴える深川本の道成は、上流貴族に対するコンプレックスを抱きつつも、中流貴族の持つ現実的な能力に自負心を抱く人物である。さらに、「女にも、まだ厭はれは

べらず」と女君に訴える道成は、女性関係においても自負心を持つていようである。

一方、慈鎮本では、深川本の波線部の箇所が欠けているために、傍線部の「あやしうとも、またなきものに思ひきこえさせむを取り所に思し召せ。」が、女君を説得する最大のポイントになっている。上流貴族であれば、多くの妻を持つ可能性があるが、自分は中流貴族であるがゆえに、女君を正妻として大事にすることができるといのである。深川本でも同様の表現があるものの、道成の説得材料は、あくまで女君に経済的安定を与えることができるという点である。

女君に対して過剰ともいえる自己アピールをする深川本の道成の描写には、中流貴族に対する語り手の揶揄が読み取れるが、その傾向は次に引用する場面で、より強くなっている。道成を拒み続ける女君に対して、狭衣から餞別に贈られた扇を見せて、道成は次のような発言をする。

A ⑦ 「我が君をこそ、かやうに命にも換へて、恋ひ悲しまめ、その青びれ男によりて、命も消えぬべく見えたまふこそ、かへりては心づきなけれ。何事を、いとかくまでは思ふぞとよ。まろが顔は、こよなうまさりたるぞ、見たまへ、見たまへ」  
(深川本 一三九)

B ⑦ 「かやうならむ人をぞ、またかくも恋ひ惑ふべき。さる青びれ君達、さらにかく恋しからじ。ただ人なりとも、まろにてこそあらめ」  
(慈鎮本 七二ウ)

深川本の道成は、狭衣ほどの人であれば、命に換えても恋しがるのはわかるが、青二才の蔵人少将をそこまで恋しがるのは不快だという。そして、傍線部のように自分の顔はもつとよいのだから見てほしいと訴え、無理やり女君が引きかっついていいる着物を引き開けようとする。こちらの道成は、自負心がありすぎる男として戯画化されている。慈鎮本では、同じく蔵人少将よりも自分の方がよいと言い、「ただ人なりとも、まろにてこそあらめ」(上流貴族ではな



い並の身分の人であっても、自分を選ぶのがよい」と訴えはするものの、深川本のような強引さと自負心は感じられない。以上検討してきたように、女君に中流貴族と結婚する実利を訴え、自分は女性に人気があると自負する深川本の道成像と比較すると、慈鎮本の道成は、女君に対する誠実さを訴えて、女君の心を動かそうとする、穏当な人物である。しかし、乳母も、そして語り手も認めるこの人物に対して、女君は激しい拒否反応しか示さない。

一方、女君を陥れることになった乳母は、両本でどのように描かれているだろうか。女君を筑紫行きの船に乗せた後の乳母の様子は、乳母に騙されたことを知った時の女君の衝撃と共に、次のように語られている。

A ⑧ 乳母、心ゆきげにして、物言ひ、笑がちなるを聞くに、ねたう悲しきこと、世の常ならず。

(深川本 一三五)

B ⑧ 乳母、心落ちゐて、し得たりと思ひたる気色を、ねたく悲しなどは世の常なるをこそ言ひけれ

(慈鎮本 七一オ)

両本とも、計画が成功したと満足する乳母に対して、女君がいましばらく悲しいと思う点で共通する。ただし深川本では、長年頼りにしてきた乳母に裏切られたという飛鳥井女君の思いが、女君の心に寄り添いつつ、別の箇所できらに次のように語られている。

乳母よろづに言へど、いとかう憂かりける心を知らで、年頃、親の心に思ひて過しけるさへ、憂くおぼゆれば、頭もたげ、目を合せんことのつらうて、聞きも入れず、ただ引き被きて臥したり。(二四二)

この引用箇所は深川本の独自異文で、女君が死を決意した直後に位置している。乳母を信じてきた自分自身を責めることによって、女君の絶望はより深くなるのである。

さらに、乳母が道成から贈り物をされ、物質的な豊かさに目が眩んで、女君が道成を受け入れようとしないうことを非難する箇所は、両本ほぼ同文で共通している。

A⑨ 乳母の、いとめでたき物ども取り散らしつつ、よろづに言へど、水をだに見入れて日頃になりぬれば、「いでや、さと思ふことぞかし。安らかにて、見えたまつりたまはば、いかにかひがひしく思し、喜ばん。いでや」とうち泣き、口惜しがりて、ただ、我が身にて、このかひは取り重ねける。（深川本 一四三〜四）

B⑨ 乳母いとめでたき物ども取りにぎはひつつ、よろづに水をだに見入れず日頃にもなりぬれば、「いでや、さと思ひしことぞかし。安らかにて、恨みたてまつりたまはば、いかにいとどかひがひしう思し喜ばむ。いで」とうち泣き口惜しがりては、ただ我が身にて、そのかひはおほし取り重ねける。

（慈鎮本 七五才）

両本とも、乳母は道成から贈り物をされ、彼の経済力に魅了されて、水さえ口にしないまま、道成を拒否し続ける女君を非難する。深川本では、A③の引用箇所の傍線部に既に見られたように、乳母は乗船する前から贈り物もらい、女君に隠れて経済的な利益を享受していた。これらの贈り物は賄賂に近いものだろう。これに対して、慈鎮本では、乗船したのちに、狭衣が道成の妻にと贈った衣装を目にして「乳母めでまどふに」と語る。乳母は、狭衣という後ろ盾のある道成の経済力や将来性を目の当たりにして、乗船後に、すっかり道成の側についてしまおうとするのである。ここでの贈り物は、女君にも贈られていて、女君にも経済的な豊かさを与えるものだった。したがって、贈り物をもって喜ぶという共通する表現はあるものの、深川本の方が自分の経済的利益を優先するという点で、乳母の悪辣さがまさっていると言えるだろう。

## IV 『源氏物語』の空蟬の陰画としての飛鳥井女君

従来から繰り返し指摘されてきたように、飛鳥井女君の物語には、『源氏物語』の夕顔の物語や浮舟の物語の影響が色濃く見られる。両親を早くに亡くして零落した女性と主人公との偶然の出会い、お互いに名乗ろうとしない男女という設定、表現の細かな類似などは、読者に夕顔の物語を喚起させる。また、入水を決意したものの、助けられて出家するという点では、浮舟の物語とも重なっている。一方で、飛鳥井女君の父親が帥中納言であるという設定は、父親が中納言兼衛門督であったものの、その父親をなくして中流貴族の伊予介の後妻におさまらざるをえなかった空蟬を連想させる。空蟬と伊予介の結婚の経緯は語られていないものの、この結婚が経済的に逼迫する中でやむをえない選択であったことは容易に想像できる。空蟬と夫の伊予介の夫婦仲は、継子にあたる紀伊守と光源氏との間で次のように話題にされていた。

「伊予介はかしづくや、君と思ふらむな」「いかがは、私の主とこそ思ひてはべるめるを、すぎずきしきことと、なにがしよりはじめてうけひきはべらずなむ」と申す。

(帚木 1—九六—七) (18)

中流貴族である夫の伊予介は、上流貴族出身の空蟬を「かしづき」、主君のように崇めているのだろうなと光源氏は問い、紀伊守は、その通りだと肯定しつつ、自分たちはそのことを不満に思っていると答える。「かしづく」という表現には、中流貴族出身の男が、上流貴族出身の妻を得て主人のようにあがめて大事にするというニュアンスが読み取れる。これは、B①の引用にあった慈鎮本の道成の願望、「やむごとなき、思ふさまならむ人を見はや。さてつひのとまりにも定めて、遠きほどにもてかしづきて率て行かむと思ひて、同じほどの人の婿などにもならざりけり」と重なってくる。伊予介が空蟬と親子ほど年が離れており、実子に「すぎずきしきこと」と非難されている点は、道

成と事情が異なるものの、中流貴族の男性が、上流貴族の女性を得ることによって、自分たちには縁の遠い上流貴族の文化を手に入れたいと願う上昇婚志向が見て取れる点は道成と共通している。

深川本では、女君を「かしづき」たいとする道成の願望は、別の箇所に出てくる。A⑥で引用した、道成が筑紫行きの船の上で女君に「なにがしの少将の蔭妻にて、道行き人ごとに心を尽し、胸をつぶしたまふ心もやは。あやしうせん、またなく思ひかしづききこえんを、取り所に思せかし」(一三五)と語る箇所である。ここでは、道成が女君の相手と思ひ込んでいる蔵人少将に対する対抗心から、「蔵人少将には妻として扱ってもらえないが、自分だったら正妻として大事にする」と女君に訴えていると考えられる。また、続く箇所では女君の顔が近くて見るといちだんと美しいので、「いかで、とく思ひ直させて、もてかしづきて見ん」(一三七)と思うと語られており、何よりも飛鳥井女君の美しさが、色好みの道成を動かしているものであって、慈鎮本と比べると、「かしづく」に上昇婚の願望はあまり感じられない。

『源氏物語』の空蟬は、夫の伊予介にかしづかれていながらもかわらず、上流貴族の女性としての矜持を持ち続けしており、伊予介を「いとすくすくし心づきなし」と見下していた。一方、光源氏を前にすると、伊予介の後妻という身分に定まってしまった身を恥じ、「数ならぬ身」と卑下せざるをえない。今井久代は、深川本や流布本の飛鳥井女君が、狭衣に傷つけられながらもなお狭衣に恋し惹かれる、浮舟や軒端萩のような生まれながらの中流貴族の娘心を思わせるのに対して、慈鎮本の飛鳥井女君には、狭衣には不釣り合いな自分には未来など望みえないという深い絶望があったと指摘している<sup>(19)</sup>。これまで見てきたように、慈鎮本の飛鳥井女君は、上流貴族の中でも最も高い身分に属する狭衣との未来を思い描くことができないが、同時に零落した自分を「かしづき」救ってくれるような中流貴族の男には、激しい恐怖心を持つのみである。語り手も乳母も、好ましい男であるとする道成は、女君の目には異形の者であるかのように映っている。

飛鳥井女君は、道成に見せられた扇から、道成が狭衣の従者であると知り、より絶望を深める。その心の内は次のようにたどられている。

A<sup>⑩</sup> などて、たださし離れたる賤の男にてだにあらで、親しく、よろづ聞き合せたまふべき、ゆかりにしもありけん、遠きほどまで行き着きて、このありさまを見扱はれぬ前に、ただいかにしても死ぬるわざもがなと思へば、かくて、五日になりぬれど、水などをだに取り寄せず。

(深川本 一四一)

B<sup>⑩</sup> たださし離れたる賤の男にてだになくて、この御故去らぬ人にてさへありけむ心憂さも、心に叶はぬ命も、宿世にても生きめぐりて、さてこそあなれ、など聞こえたてまつり、また行きも離れず、我も聞きたてまつりてありなむや、この事もうち扱はれて、引き具してありなむ、と聞かれたてまつらむことはゆゆしく、夢にだにいかでか見えたてまつらじ、と思ふに、すべきやうのなきにこそはあらめ、ただこの海に落ち入りなむ、と思ひ寄りぬるにつけても、罪深さいかばかりならむ、と悲しういみじ。さりとて、この世の恥を隠さではあるべきならねば、いかならむ隙とのみ思ふ。

(慈鎮本 七四 オウウ)

道成が、狭衣と無関係な身分の卑しい男でさえなくて、狭衣と関係が深い男だったと知り、女君が衝撃を受ける点は両本に共通するが、慈鎮本はその後の女君の心の動きを丹念にたどる。女君はそのような巡り合わせも、思い通りにならない命も宿世なのだと思うと同時に、その宿世によつて、生き長らえて、自分が道成の妻になっている(さてこそあなれ)と狭衣が聞き、自分も狭衣が知ったことを耳にすることになるだろう(我も聞きたてまつりてありなむや)、懐妊した身を道成に世話されて筑紫に連れて行かれたと、狭衣に聞かれるのは忌まわしい、と考える。そのような苦悩の末に、女君は海に入水することを決意するのである。つまり、道成を拒めないなら死ぬしかないという思いよりも、このまま生き長らえて、自分が道成の妻になっていることを知られたくないという思いが女君を追い詰める。

ていくのである。そこには、狭衣の従者程度の中流貴族の正妻におさまって、「その程度の女だったのだ」と狭衣に思われたくないという、飛鳥井女君の矜持が読み取れる。乳母の願望や、道成の想いがまっとうであるだけに、このままでは、恵まれた妻の座についてと世間から思われかねない中で、女君は空蟬のように「身の程が定まる」ことを避けようとする。そのような女君の矜持が、入水という手段を択ばせるのである。

深川本では、傍線部にあるように、女君は、筑紫に到着して出産の世話をされる前に死にたいと思つて、水さえ飲まずに過ごしたとしており、この時点で入水を決意しているわけではない。入水を決意する場面は、次のように語られている。

這ひ寄りては、とざまかうざまに言ひ恨みつつ、一日も波になど。すさみ臥したるを聞くも、愛敬なくゆゆしくて、いかにせまし、かく憂きを知らぬ命長さには、遂にいかにならんずらん、と思ふに、すべき方のなければ、この海にや落ち入りなまし、と仏神を念じたてまつるに（一四三）

似たような表現は慈鎮本にも見られるが、深川本ではここではじめて女君が入水を考えることになっている。つまり、言い寄ってくる道成に対する嫌悪感と、これ以上拒否できないかもしれないという絶望が、女君に入水を考えさせたのである。身の程が定まることを拒み、狭衣との愛の記憶を我が身にとどめたまま死のうとする慈鎮本の飛鳥井女君は、身の程が定まったのちに光源氏と出会い、心惹かれながらも拒まざるを得ない空蟬を反転させた姿とも言えるだろう。

## V 結

『狭衣物語』の異本系伝本に属する慈鎮本では、脇役である道成と乳母の造型に、深川本とは異なる傾向を見るこ

とができた。道成が、上流貴族の女性を正妻にして大事にしたいとする願望は、乳母が飛鳥井女君に黙って結婚話を進めることを正当化している。道成の経済力に目が眩んだことが強調される深川本の乳母と比較すると、慈鎮本の乳母は、女君を思つて苦渋の選択をした末に、結果的に女君を騙すことになる。道成像の改変と乳母像の改変は別個に行われているのではなく、有機的に結びついているのである。

また、乳母と語り手の視点から好意的に語られている道成が、女君には嫌悪感しか呼び起こさないという落差は、慈鎮本においてより強調されている。これは、乳母の常識的な判断や、道成が精いっぱい示そうとする誠意を前にしても崩し得ない、上流貴族の姫君としての矜持が女君の中にあることを浮き彫りにする。慈鎮本が描く飛鳥井女君は、没落したのちも、秘かに上流貴族の姫君としての矜持を持ち続けているという点で、『源氏物語』の空蟬の系譜を引く人物である。そして、道成、乳母、女君の造型は、分かちがたく絡み合いながら、深川本とは異なる物語の論理を紡ぎだしている。

従来、異本系の本文は、深川本系の本文を簡略化して生まれたものという指摘がなされてきたが、実際には登場人物の心内語が加えられたり、全面的に書き改められている箇所もあり、このような改変は、慈鎮本独自の物語の論理を構築することに寄与している。異本系の本文を生み出した改作者は、決められた枠組みの中で表現を時には削り、時には加えながら、自分好みの、しかし『狭衣物語』の本質は残した、もうひとつの『狭衣物語』を生み出そうとしていたのである。

# 注

- (1) 中田剛直(『校本 狭衣物語』巻一～三 桜楓社、一九七六／八〇年)と三谷栄一(『狭衣物語の研究「伝本系統論編」』笠間書院、二〇〇〇年)の説が代表的なものである。
- (2) 三谷栄一は深川本を原態に近い伝本と考えるが、片岡利博は深川本を混態本文と考えている(『異文の愉悅 狭衣物語本文研究』笠間書院、二〇一三年)。



- (3) 注(2)の著書。
  - (4) 井上新子「飛鳥井の君物語」の悲劇の諸相―『狭衣物語』巻一の諸本をめぐって―『論叢狭衣物語1 本文と表現』新典社、二〇〇〇年。
  - (5) 伝慈鎮本が発見される以前には、為家本が異本系本文の最善本とされてきたが、為家本の巻一の冒頭部分は流布本系の本文である。そこで、異本系本文の特徴を考える際には、慈鎮本を用いた方がよいと判断した。
  - (6) 今井久代「『狭衣物語』第二系統本文の特徴について―巻一天稚御子降臨譚以前―『東京女子大学紀要論集』第六六巻二号、二〇一六年三月。」「『狭衣物語』異本系本文の達成―天稚御子降臨譚の位置づけから―『東京女子大学紀要論集』第六七巻一号、二〇一六年九月。」「『狭衣物語』異本系本文の世界―飛鳥井物語を中心に―『国語と国文学』第九四巻一二号、二〇一七年一二月。
  - (7) 深川本の本文は、小学館新編日本古典文学全集『狭衣物語①』に拠り、数字はページ数を表す。なお、校訂されている箇所については、\*を付し、表の左に原表記を示した。
  - (8) 慈鎮本の本文は、『狭衣物語諸本集成 第三巻 伝慈鎮本』の翻刻により、適宜仮名遣いの誤りを正し、漢字を当て、句読点を付している。
  - (9) 鈴木泰恵は、色好みの道成が狭衣の模倣者たらんと、おおけない恋に踏み込もうとしているとして、飛鳥井女君が狭衣の恋人と知っていないながら道成が言い寄った可能性を指摘する(『『狭衣物語』のちぐはぐな「語り」―飛鳥井物語における道成の「不知」をめぐって―』『日本文学』二〇一七年一月)。
  - (10) 小学館新編日本古典文学全集の現代語訳。
  - (11) 流布本の本文は、新潮日本古典集成に拠り、数字はページ数を表す。
  - (12) 深川本では、巻二で道成が狭衣に飛鳥井女君入水の経緯を語る場面、寺の局にいた童に出会って、その童から、女君が帥の平中納言の娘であること、両親は筑紫で亡くなったこと、蔵人少将が通っていることを聞いたとする。道成が乳母に申し入れる時期が、巻一と巻二とで矛盾している。
  - (13) 長谷川佳男「狭衣物語の本文批評―巻一、第一群と第三群の関係―」『上智大学 国文学論集』二二号、一九八八年一月。
  - (14) 久下晴康「狭衣物語の乳母たち」『平安文学研究』六三号、一九八〇年七月。
- 三谷栄一「飛鳥井女君物語に見る継子虐め譚」『狭衣物語の研究(異本文学論輯)』笠間書院、二〇〇二年。

三谷論文では、深川本と異本系の為家本を比較し、異本系では深川本よりも更に乳母を悪役にし、継子虐めの憎らしさを強調しているとしている。

- (15) 慈鎮本と同じ異本系で、本文も近い伝為家筆本では、「ありしよの装束裁ちてまだらにしなしたるに袂おどろおどろしう赤みて」とする。

- (16) 「かしの毛太る」は、『今昔物語集』においては、怪異現象などに遭遇した時の恐怖を表す定型的な表現である。

- (17) 流布本にも深川本と同様の表現があるが、もう少し簡略になっている。

- (18) 『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集に拠り、アラビア数字は巻数、漢数字はページ数を示す。

- (19) 注(6)の『狭衣物語』異本系本文の世界―飛鳥井物語を中心に―、二八頁。

付記 本稿は、二〇一六年度科学研究費基盤研究C(一般)の研究成果の一部である。